

第20回白壁賞は小林正明氏らが、 第39回村上記念「胃と腸」賞は 梅野淳嗣氏らが受賞

残暑厳しい中にもようやく秋の風を感じ始めた2014年9月17日(水)、東京の笹川記念会館で開かれた早期胃癌研究会の席上にて、第20回白壁賞と第39回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第20回白壁賞は小林正明・他「Magnifying narrow-band imaging of surface maturation in early differentiated-type gastric cancers after *Helicobacter pylori* eradication」(『Journal of Gastroenterology』48: 1332-1342, 2013)に、第39回村上記念「胃と腸」賞は梅野淳嗣・他「虚血性小腸炎の臨床像」(『胃と腸』48: 1704-1716, 2013)に贈られた。

第20回白壁賞

司会の丸山保彦氏(藤枝市立総合病院消化器内科)から、まず白壁賞の受賞者代表として小林正明氏(新潟大学医歯学総合病院光学医療診療部)が紹介された。白壁賞は、故白壁彦夫氏の業績を讃え、“消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文”に贈られる賞で、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考対象となる。

選考委員を代表して二村聡氏(福岡大学医学部病理学講座)から、画像の質、論文の独創性、疾患の重要性、文章力、形態診断治療などの観点から厳密な審査が行われたことが説明された。次いで、本論文の受賞理由を、“この論文の執筆は、除菌後に発見される胃癌が従来言われているほど見つけやすいものではないという実感が発端となっています。どうして除菌後の胃癌は見つけにくいのかという日常診療から生じた素朴な疑問に迫るため、除菌後に発見された分化型早期胃癌と除菌未施行の分化型早期胃癌を各50病変登録し、その内視鏡的特徴と組織学的特徴の抽出を試みました。なかでも、除菌後の胃癌が内視鏡観察下で不明瞭となる原因として、NBI併用拡大観察下では胃炎様所見を呈することを挙げ、さらに組織標本では粘膜内癌巣における表層成熟現象(surface maturation)を挙げました。内視鏡画像および組織標本のきわめて丁寧な解析から導き出されたこれらの結果は、一億総除菌時代に突入しつつある本邦の胃癌診療において留意すべきものです。したがって、除菌後の胃粘膜から癌を見つけ出す役割を担う臨床医のみならず、生検診断を担当する病理医にとっても大変有用な知見と考えられます”と解説した。

続いて、「胃と腸」編集委員長の鶴田修氏(久留米大学



▲選考理由を述べる二村聡氏



▲祝辞を述べる鶴田修氏

医学部内科学講座消化器内科部門)から祝辞とともに、賞状と楯が贈呈された。医学書院の金原優社長からは、賞金50万円と副賞として創刊号から全論文をスマートデバイスでも閲覧できる「胃と腸」の電子ジャーナルが贈られた。

受賞の挨拶として小林氏は、“このたびは「白壁賞」というこの上ない栄誉ある賞をいただきまして、大変光栄に存じ上げます。受賞に当たりまして、共著者、共同研究者の先生方ならびに日頃診療・研究でサポートしていただいている教室の先生方に感謝申し上げたいと思います。また、このたび白壁賞の応募に当たり、強力にご推薦いただきました小澤俊文先生に心より感謝申し上げます。私は、大学院の四年間、渡辺英伸先生、味岡洋一先生のもと、消化管病理を学ぶ機会をいただきました。ここでは、良い研究、新しい発見のためには、まず良い材料を用意すること、そして、その標本に繰り返し問わなければならないということを教えていただきました。その教えが今回の研究の根幹となっております”と述べ、“私は決して除菌治療を否定するわけではございません。私が申し上げたいことは、除菌後の内視鏡観察時には、少しわかりにくい早期胃癌があることに注意していただきたいということだけです。ただ、注意して観察しろと言われても困るわけで、除菌後胃癌の観察のポイントをもう少し明確にすることが今後の課題と考えておりました。現在、当科では除菌後胃癌が100病変になり、「胃と腸」第50巻(2015年)第3号に除菌後胃癌の特徴を執筆する機会をいただいたこともあって、今回さらに検討を加えているところでございます。「白壁賞」の名に恥じぬよう、先生方のお役に立てるような論文を何とかが出したいと思っております。どうか乞うご期待ということで、私の今回の受賞のご挨拶とさせていただきます。”と受賞挨拶を締めくくった。

第39回村上記念「胃と腸」賞

続いて、村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。村



▲ 第 20 回白壁賞を受賞した小林正明氏



▲ 第 39 回村上記念「胃と腸」賞を受賞した梅野淳嗣氏

上記「胃と腸」賞は、故村上忠重氏の業績を讃え、“消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文”に贈られる賞で、「胃と腸」48 巻に掲載された全論文が選考対象となった。丸山氏より受賞者代表として梅野淳嗣氏（九州大学大学院病態機能内科学）が紹介された後、二村氏から白壁賞と同様に厳密で慎重な選考が行われたことが報告された。次いで、本論文の概要について、“本論文では、虚血性小腸炎 24 例の臨床像についてきわめて詳細な解析がなされています。病変が回腸に限局する例は、回腸以外にも病変を有する例よりも高齢であり、高度狭窄に至る率が高いこと、また続発性の例は、特発性の例よりも高度の狭窄を来しやすいことを明らかにしました。さらに、術前内視鏡検査が可能な例では全周性区域性潰瘍が特徴的であることを指摘しています。本来、まれな疾患ですが、約 34 年の年月をかけて集積した自験 24 例を徹底的に解析することにより、日常診療に有用な情報を導き出しています。このように 1 例 1 例を大切にした解析手法は、「胃と腸」誌が刊行以来目指しているものであります。著者らの地道で丁寧な解析に心から敬意を表します”と賛辞を述べた後に、白壁賞と同様に、鶴田編集委員長から賞状と楯が、金原社長からは賞金 50 万円と副賞の「胃と腸」の電子ジャーナルが贈られた。

受賞の挨拶として、梅野氏は、“今回の受賞に至ったのも普段から指導していただいております前・研究室主任の松本主之先生、現・研究室主任の江崎幹宏先生、そして前・教授の飯田三雄先生、病理の平橋美奈子先生、そのほか大勢の先生の御指導のおかげで受賞に至ること



▲ 両氏には鶴田氏から賞状と楯が贈られた

ができたと考えております。私の所属しております九州大学の第二内科は以前より症例を 1 例 1 例、大切に診療に当たるということをモットーにやっております。今回は 24 症例という虚血性小腸炎の比較的少ない症例を対象とした論文ではありますが、受賞によって 1 例 1 例、大切に丁寧にみていくということが評価されたということについて、非常に光栄に感じております”と謝辞を述べ、“これまで「胃と腸」賞を受賞してきた先生方は消化器の形態学というものを極めた先生方ばかりだと思っております。私はまだそういった立場になく、依然として未熟、勉強が足りない状況でありますので、今後この受賞に恥じないように 1 例 1 例、丁寧に診療に当たりたいと考えております。本日は本当にありがとうございました”と今後の抱負を語り、挨拶を終えた。

最後に、両賞の受賞者に改めて満員の会場から賞賛の拍手が贈られ、授賞式は終了した。